参加型教材実験プロジェクトⅠ

中部支部企画「保育・学校教育で扱う歌の特徴や魅力を探る」

中部支部のプロジェクトでは、参加者が幼児・小学校低学年・小学校中学年・小学校高学年・中学校の５つの区分から選択し、４～７人のグループに分かれて歌の特徴や魅力について自由に話し合いました。どのグループも「まずは歌ってみよう」ということで、会場に《春がきた》《とんび》《スキーの歌》などグループそれぞれの歌声が響きました。声を合わせて歌ったことで初対面同士の場も一気に和み、歌ってみて改めて感じた曲の特徴や魅力について、活発な意見交換が始まりました。それぞれのグループにはタブレットが１台配布され、企画支部によって厳選された資料や音声を適宜閲覧、視聴することができました。例えば、幼児対象の《虫のこえ》のグループでは、虫の鳴き声を表す擬音語の歌詞が子どもの興味を引きつける曲の特徴と考え、タブレットで実際の虫の鳴き声を順番に聴いてみました。すると、「この鳴き声が羽をこすりつける音ということに面白さを感じる」という声が上がり、幼児が「こする音」を楽しむ「音探し」や「音遊び」の活動に展開できるのでは、という話になりました。扱う素材は何がいいのか、気に入った音を聴き合う活動や劇あそびに展開できるのでは、など活動の様々なアイデアが出て大いに盛り上がりました。

最後にグループで話し合った内容を交流する時間が設けられました。中学校対象の《早春賦》のグループからは「子どもにとって跳躍が続いて歌いにくいと思われる箇所をなだらかで歌いやすい旋律に変えて歌ってみたところ、物足りなさを感じた」と歌の比較聴取を含めた発表がありました。このように実験的な取り組みを通して参加者が子どもの歌の特徴とその魅力を再発見した有意義な時間となりました。

参加型教材実験プロジェクトⅡ

四国支部企画「奏法と音色の追究から生まれる箏の魅力 ―《うさぎ》を教材に―」

参加型教材実験プロジェクトの醍醐味は、実際に音や音楽と直接相互作用しながら、その教材のもつ特性や魅力について考える点にあります。こちらのプロジェクトでは参加者の目の前にお箏が置かれ、「触ってみたい！」という衝動にかられて、音探究が始まりました。一音ずつ丁寧に絃を弾く弾き方もあれば、擦ってみたり、はじいてみたり、押してみたり・・・制約もなく、自由自在に音を探究してよいという時間が与えられた参加者は、絃だけでなく、胴を叩いてみたりするなど、さまざまなアイデアを試しながら音探究に没頭しました。そのようにして見つけた音に対して、箏演奏家でもある遠藤綾子会員が「これは実は◯◯という奏法で・・・・という曲にも使われています」とコメントすることで、偶然に見つけた音に意味がもたらされる瞬間もありました。後半は《うさぎ》を用いて、一つのお箏に３～５人がよってたかってアレンジを加えるという活動が行われました。前奏後奏をつけるグループやリズム伴奏やオスティナートをつけるグループもあり、発表では共感あり、感嘆ありの大変充実した時間となりました。

一通りの活動を終えたあとは、教材としての特性や魅力を言語化する時間が与えられ、お箏のもつ自由自在さが探究の広がりをもたらすこと、また《うさぎ》というあるテーマがあるとイメージの根拠ができてアレンジがしやすくなるなどの発見がありました。